

辺野古の今 沖縄から見えるもの

越生町 水沢澄江

こんにちは。辺野古のカヌーチーム「辺野古ぶるー」の水沢と言います。

辺野古に、新しい基地を作らせないという闘いは、実は1996年から、もう20年余りの年月が経ちます。私は、2004年から通い始めました。

公立中学校の教師をしていたので、初めは夏、冬、春と休みのたびに通っていました。退職してからは、2ヵ月に一度行っています。

社会科を教えていて、戦争学習の中で、なぜ戦争を止められなかったのだろうと学習する中で、今、自分たち大人がやるべきことは、戦争への動きにストップをかけることではないかと、沖縄に通い始めました。

沖縄は現政権の姿勢の縮図のようで、法は無視され、民意も、人権もないがしろにされ、憲法の「番外地」のようです。

沖縄戦を知る70代以上のおじい、おばあは、二度と沖縄を戦場にはしたくない、平和な沖縄を未来の子供たちに手渡したいと、座り込むことで、政権へのNOの意思表示をしています。沖縄らしくしなやかに、歌、踊りが闘いの中に根付いています。

2月の「早春のつどい」では、『沖縄で何が起きているのか』を上映します。現在の沖縄の辺野古をめぐる現状を、ドキュメント映像として知ることができます。

多くの人に、知って、考えて、そして、行動してほしいと思って、話をさせてもらいます。

開戦の12月 戦争を語り継ぐ

泥沼の戦争を米英にも広げた12月の「戦争を語り継ぐ会」を、12月14日、坂戸駅前集会施設で開催しました。今回の語り部は、坂戸市西坂戸の鈴木啓之さん。

「疎開でのつらい思い…戦争は絶対に」と題してのお話しでは、空襲が激しくなって疎開した先での大変

つらい思い、戦争は絶対にやってはいけないと思ったこと、「教え子を戦場に送るな」との思いで教師を続けてきたなかで、違いを受け止めながら話し合うことの大切さを、落ち着いた笑顔の中で語られました。

語り継ぐ会の感想から(1)

◆ 疎開時のお話には大いに一致すること大でした。私はといえば、鈴木さんたちのような疎開学童を迎えて宿泊先まで重い荷物を持って送りました。当時は食糧難や身の回りの支度や履き物など、惨めなものでした。

私の街は旅館とお寺へ送ることでしたが私たちより上の同級生は伊香保の旅館に行きました。兄も帰って来てから「疲れたァ腹減ったァ」と嘆いたのを覚えています。

私の亡夫も3年生の時に東京の荒川区から夜行列車で福島へ疎開して、ひもじい思いや両親を思い出して泣く子もいたなど、何度か聞きました。

やはり憲法9条は大切な宝です。絶対守らなければと強く思いました。(浅井時子)

◆ 戦前・戦中・戦後を具体的な体験を込めてしっかりと語っていただいて、同時代をきた者として納得することが多くありました。

83年間生きてきたことを、このように整

理して語ることは、語る人、聴く人にとっても大切なことだと思います。そのようなことを積み重ねて、戦争につながるようなことには力を貸さないぞとの思いを強めたいものです。

語った方は教職員でしたから、「教え子を戦場に送



九条の会さかど 早春のつどい

日 時 2月9日(日曜日)13時30分から16時

会 場 坂戸駅前集会施設(2階)会議室1

話題提供 辺野古の今 沖縄から見えるもの(水沢澄江)

参加費 300円(茶菓代です。お弁当やお酒はありません)

9条のこと、平和のこと、伝えたいこと、やりたいこと、一人ひとりの思いに耳を傾けましょう。お茶やお菓子などの用意の都合上、ご参加を2月6日(木曜日)までにご連絡ください(049-282-4968 小林)

らない」を常に心に留め、みんなのものとしていたと語りました。

政治家こそ「国民を戦場に送らない」と言って欲しいものと私は思います。(新井竹子)

海上自衛隊 中東へ派兵

末広町 石川裕一

1月10日、河野防衛相は中東(ジブチ)へ海上自衛隊(60名)を2ヵ月間情報収集活動のため、派遣すると発表しました。

中東情勢が緊迫したのは、アメリカがイランとの核合意を一方的に破棄して離脱した上、空爆で司令官を殺害したのが原因です。国連決議に違反した先制攻撃であり、アメリカ国内からも、厳しい批判の声が上がるのは当然です。

安倍政権はアメリカのトランプ政権の行為には無批判で、むしろトランプ政権の要請している「有志連合への呼びかけ」に応じて自衛隊を派遣するのは、緊張を一層強めることになるだけです。

緊張緩和のためには

日本船舶の安全な通行を確保するためには、先ずアメリカに「核合意への復帰」を呼びかけその実現のための外交努力を尽くすことではないでしょうか。憲法9条を持つ日本だからこそできるのです。「そんな外交は非現実的で不可能だ」という意見も聞かれます。

しかし平和で安全を望むならば、「争いが起きても軍事的な対応ではなく、話し合いで解決を」が世界の趨勢です。東南アジアでも南半球(米州機構)でも、そのための努力が粘り強く進められています。

平和と人間らしい暮らしを

しかし残念なことに日本では、集団的自衛権の行使を閣議決定し一連の戦争法を国会で強行採決し、軍事大国化のための予算膨張を進めてきました。今回の中東への派兵もその一環に過ぎません。

憲法9条を生かした平和外交と、人間らしく生きることを守るための取り組みが厳しく求められています。憲法を「絵に描いた餅」にしないために「9条の会」が果たす役割は果てしなく大きいと感じさせる新年でした。

絵馬『世界の平和 N・S』(4)

母の想いを受けとめながら

泉町 戸来淑子

母の長姉の自分史によると、3月10日未明、母たちが寝ていると、突然警戒警報と空襲警報が鳴りました。急いでラジオをかけると「B29、300機、北上する!」。皆で慌てて防空壕に逃げ込みました。母の家の防空壕は、庭の地面を掘って、雨戸の戸板を屋根替わりにしたもの。戸板に土を被せ、配給のカボチャの種を蒔き、カモフラージュしていたもの。母の家族は学童疎開をしている弟を除いた6人。ギュウギュウ詰めで動くことができなかつたといいます。長姉は「(母が)学童疎

開に出た頃は、ブーンと飛行機の音が聞こえるくらいで、空襲警報はほとんどなかった。(母が)防空壕に入るのは初めて。さぞかしびっくりして怖かったことだろう」と妹である母を思って回想しています。その時長姉は16歳くらいでした。

少し経つと静かになったので、長姉が外に出たら、東の空が真っ赤になっていたといいます。赤くなった空に、黒いゴマのようなものがバラバラバラッと落ち、「ドカーン、ドカーン、ドカーン、ドカーン…」と遙か遠くで地響きが聞こえたといいます。現在の墨田区、台東区、江東区辺りが真っ赤になっており、昼間のように明るく、遠くの飛行機まではっきり見えたといいます。

3月10日午前0時8分から始まった爆撃は、それまでとは異なる特徴がありました。

1. 深夜だったこと。真っ暗闇では日本の高射砲はほとんど役に立ちませんでした。
2. 来襲したB29が約300機もの大編成だったこと。
3. これまでにない2.0キロ~2.5キロの超低空で侵入したこと。燃料が減らせる分焼夷弾を積めて、低空だから爆撃目標がよくわかりました。
4. 燃焼力の強い各種焼夷爆弾約1700トン、約2万発を投下したこと。

目標は、東京で最も人口が密集している下町地区。米軍は、日本の風土を調べ尽くして、短時間で下町地区を焼き尽くすために、北風の強い3月10日未明に決行しました。日本人の戦う意欲を失わせるために、陸軍記念日の3月10日を選んだともいわれています。

地上はたちまち白熱状態になり、吹き上げる火焰の嵐に、あるB29は一瞬に数百メートルも空中に跳ね飛ばされて、搭乗員たちが座席から放り出されたという米軍記録もありました。

B29の爆撃は約2時間半続きました。約27万戸の家屋が焼失し、死亡者数は約10万人、被災者数は100万人以上でした。

特に集中的な大被害を出したところは言問橋でした。浅草区(現・台東区)と向島区(現・墨田区)を結ぶ言問橋は、長さ240メートルで、1928年(昭和3年)に完成した橋です。焼夷弾による火災が各所に広がると、隅田川兩岸の人々は、対岸まで逃げれば助かるだろうと言問橋を目指しました。押し合いへし合いの頭上に火焰が降り注ぎ、橋の上をなめて走りました。髪の毛が燃えてのけぞる人、狂ったように欄干を越える人がドミノ倒しのようになって火だるまになりました。橋の上は足の踏み場もないほどの焼死体で埋まりました。3月10日の東京大空襲の後も空襲は続きました。4月になり、母は中野区の高女学校に入学しました。ある日登校すると、校舎が全焼していたそうです。(続く)

今後の運営委員会(会員なら誰でも参加できます)

2月27日、3月26日、4月23日(第4木曜日10時~12時)
会場は坂戸市役所に隣接した勤労女性センター談話室